

健全學

九

庫文閣内			
一 九 六 函	三 二 六 一 一	和	書
一 架	六 冊	號	類

内閣文庫			
番號	和	22611	
冊數	6	(5)	
函號	196	18	



慶應丁卯冬新鑄

杉田擴玄端譯

下編

健全學

致高館藏版

里
里
里
里
里
里
里
里
里
里

健全學下編卷之上

明治九年時未

杉田擴玄端 譯

第十一篇

飲料の論

一 消耗する者液回復し元温を保固するが為小體中
採收する諸物ハ始小消食諸器の機關を以て先之液
流體とあり一實は諸物ハ流體とありと此の如く小
窠の胞皮を透貫して全身に運輸するを以て得るを

第一篇 下編 飲料 百五十一 致高館藏版

○血球とて心より肺に至り、肺より再び心へ來り、心より又全身へ運行せらるる血球の間は在て游泳する「セリム」一名の流動質は要需しは、是故に動物の體中へ在て運輸するごとく、要する處へ必ず此の流體あるなり。

凡、身體自然の良能ハ各部へ固有ある良好の流體は具備せ、而して諸物を運輸するに要する用なる流體ハ必は透明ある清水なりと云。

乳糜未熟の血中より生機を保続せんとし、諸分水と混合して一種の溶解をなす血中より離子、白質及び線

質、溶解をなす、又、排泄諸液ハ惟其排泄する處に物質は游泳せしむる水液のみにて成り、

體中にて燃燒すべき水素瓦斯ガの一分ハ酸素と親和して水へ變じ、窒素を舍り、筋質ハ分離して「アムモニア」生じ且直に其「アムモニア」の排泄をなす易らしむるがため、之は水中へ吸収せ、

炭素の燃燒するより生じる炭酸も亦一部は水へ溶解して體外へ排出し、又其餘瓦斯状となりて肺より呼出せらるる部も亦同一の運輸物即ちを以て其生じたる處より肺の小胞へまで來るなり。

若一個の流體他物を變換せしめ、只運輸するのこの用
 不充つべしとせば、其流體其運輸する物質と抱合を
 るべく、各々各個獨立する代要を、○水は能く諸物に
 吸收を盡し、雖之と抱合するべく、能はば、此抱合す
 るべく、能はざるの性の淨水に於て最甚しきを見る、
 水も運輸に於てハ中性にて止り、其運輸する諸物の
 性を毫も變ぜず、只諸物に對して中立を以、又運輸
 を容易としんが為、能く諸質諸分を混淆すと雖、其
 行旅に終期し、全く之を變換するべく、かく再び採
 收するべく、得べし、即曹達（曹達）或ハ密尼沙（密尼沙）を綠礬油と

混合するべく、復し曹達（曹達）或ハ密尼沙（密尼沙）に非ざりて、其
 混合より人の通知せる、苦礬及び瀉利塩を得べし、然
 ると曹達（曹達）或ハ密尼沙（密尼沙）と水中に混合するべく、少く
 も其質を變ぜば、其水は再び全く（即へハ蒸散し
 て）驅散せられ、直し曹達（曹達）及び密尼沙（密尼沙）其元體を還りて
 其性質毫も失ふまじり、如し、
 水ハ體中に在りて運輸物とす、其用をあるの外尚、
 既し前にも論するが如く、内部の元温を順整し、その
 の用をも亦充ち、○水も排泄諸機及び發汗に於
 てハ絶へば血中より之を採用すべし、然るも諸液の



運行ハ常ニ流動する事ニ要する故ニ水の輸入ハ養分の輸入の如ク絶ハ必要とする事ナリ。○人々宜ク記憶すべし、血ハ榮養流動ノ主能とする事ナリ。若シ血ノ運行ニ此榮養流動ノ一能ニ乏シク事あるハ直ニ健全を損ずるに至る事ナリ。是故ニ流動ノ保存を要する事ニ榮養ノ保存も同ク誠ニ必要あり。是を以テ其要須とする時ニ方テハ時々水を要需とせん。○血其要務を良好ニ且ツ容易ニせん。為ニ稠厚度ニ過ぐる事ナク、胃及び咽喉の裏面ニ異化機運ヲ發する事ニ以テ其部の諸神經直ニ之ニ感觸

且ツ之を渴の感覺ニ變遷する事ナリ。○此刺衝ニ奮起せしめて胃中飲液を引く時、其水分直ニ血脈の細管中（其薄膜を貫透して）ニ吸収せしむ。直ニ渾身の血行中ニ混淆し、長途の迴路ヲ循行する事ニ要せば、諸腸乳糜諸道ヲ通行して心肺ニ至リ、又再ビ心ニ至リて其後始めて動血脈及び榮養の毛様管ニ至る。榮養する血分と共に渾身小周流を是を以テ清水及び既ニ全く溶解する他の諸物、惟水中ニ游泳する事ナリ。○血亦血中ニ吸収する事ナリ。○此の理あり、人の常用する諸種の飲料ニ總テ溶解の功あるハ畢

竟水よりあり、○諸飲料の溶解、是を以て運輸
 又渴を消まるとの功ハ、全く其飲料中不含有する水の
 量不關係す、是故に飲料中清水を含有すると多量
 あるに準じ其功も亦從て大なり、而して其水分中既
 1 他の諸物を含有すると其體中ニ在て他の諸物
 を溶解するの功少く是を以て之を用いて善良の目
 的不應ぞとあるも亦甚だ少く然とも習癖及び
 生來の嗜好を變ぜしむる事件、許多複雜の飲料を用
 りしむるあり、即ち麥酒、葡萄酒及び其他諸般の銳
 烈飲料の如し、○此諸飲料より皆其水不次て最大の

成分として「アルコール」と名づくる流體を包含せり、
 ル・コ・ホル、ハ「亞喇伯名あり、他の某物の名の如く此名
 も亞喇伯學者の用たる所より採用せり、○セ子ノ
 ル、燒酒、リム、及び「サステイ酒」半より多く「アルコホ
 ル」を包含す、ポルト「ピルリ」マテラの如き強き酒類ハ太
 約全量の五分一「アルコール」を含有して百分中より十
 六、乃至二十分を含有せり、○尋常の「ホルテアウク
 ス酒」佛蘭西の「葡萄酒」及び「萊尼酒」ハ「アルコホル」の比例
 更に少く、又「ポルト」及び「エール」の如き強烈の麥
 酒ハ太約百分中五分乃至六分よりして時としてハ更

小多記しとも之りくといひ、○稀薄ある麥酒ハ「アルコホル」を會せしむる更し甚ど少く太約百分中より一分許かり

〔註〕督學「インストン」ハ諸種の酒類中ホ會りし純粹「アルコホル」の比例を記載するごと左の如し、

全量百分中の「アルコホル」

- 「ポルト酒」 二十一分乃至二十三分
- 「マテラ酒」 十八分乃至二十二分
- 「セルリ酒」 十五分乃至二十五分
- 「マルサラ酒」 十四分乃至二十一分

「クラート酒」 精製「アルコホル」 九分乃至十五分

「ボウルズンチイ酒」 九分乃至十三分

「トカイ酒」 九分

「オニ酒」 八分乃至十三分

「バウセル酒」 八分乃至九分

「三鞭酒」 五分乃至十五分

右に記する所の者の英國より常用とせし最良種とを以て(○)「アルコホル」酒の右の如し高比例とありハ必定其最良種とに歸するなり(○)實ハ佛蘭西酒の輸入より重税と証するハ常ニ英國ハ

専ら最良酒類輸入すべき基本とせり、是英國に於てハ運送貨及び輸入税酒類の佳悪に拘らず、同一あるを以てなり、
 自餘「アルコール」の量ハ同種ハ酒に於ても葡萄採收の時節と間種の酒とに於て大小異なるあり

蒸餾せし酒類の比例ハ左に示す所の如し

百分中含む所の「アルコール」

英國にて其強弱を試驗する為ニ蒸餾する者ハ

科量 容量

且「コシ」酒 乃至五四
 「リ」酒 乃至七
 「セ」酒 乃至五
 「井」酒 乃至五九
 「麥」酒 乃至一
 「柿」酒 乃至一五
 「ポ」酒 乃至三五
 「グ」酒 乃至五五
 「苦」酒 乃至一
 「テ」酒 乃至一

百五十六 鼓嶋官蔵版

更に大なりと云

「アルコホール」は未だ植物の内機^{カラクリ}を變じて聚合^{ゴウゴウ}機性の態^{カタ}に至らざる純糖なり。○總て泡醸^{ウヅリ}に至る人は性お
 ずく「アルコホール」は生下^{ナマ}を諸液中^{シヨリク}を必ず糖以
 るなり。○葡萄酒又ハ穀物の萌芽^{カサネ}を生ずる者ハ熱湯
 と混する液中ハ糖の大量^{リョウリヤウ}を含りおとる其味を以
 と容易^{ユキヤク}不知^{シラズ}るを得^エなり。○今此の如き甘味の液
 ハ既^{スデ}に發酵^{キョウ}する物品又ハ醇^{ジュン}と混し或ハ其甘味の液
 中既^{スデ}に自ら發酵^{キョウ}物を含むとく葡萄酒の如く^シく
 且^カ之^ノ温^ニを如^クする^ルと^モ其^ノ中^ニハ^ハ包^含する^所の糖^全

く變性と始む登^ノり。○糖ハ炭素・水素及び酸素の同量
 より成る者なり。而して炭素十二分水素十二分酸素
 十二分と定むべし。今泡醸の時一方ハ炭素の一部(四
 分)酸素の一部(八分)と親和して茲^ニハ炭酸を生ずるハ
 其殘餘の炭素八分と酸素四分と水素一二分と親和
 して新^ニハ一個の聚成分^{カサネ}なり。復^シハ甘味を^シて却て
 酒精と名^ズく^ル。一異性を得^ルる^所の物^ハ生^ズる^所あり。即^チ其
 許多の分子^ヲ一併^ニハ集合^スる^所ともハ揮發^{キョウハツ}氣^キの美香
 お^ハ燃焼^シ易^ク流體^ニなり。一個精神^ヲを昏迷^シせしめ
 ざるの功^ヲ成^ス具^ス。通常此物を酒精若くハ「アルコホル

と名くは、其の分子式は $C_{12}H_{22}O_{11}$ である。是故にアルホルの各分子は、酸素、炭素及び水素より成りて其比例は、四、八、三二、即ち、一、二、三、と云ふなり。糖の某秤量に於て包含する物質の秤量、即ち、炭素、酸素、水素の秤量、を求めんとす。炭素の秤量は、其の秤量の五十分半、酸素の秤量は、其の秤量の六分半、水素の秤量は、其の秤量の六分半、と云ふなり。總計百分の一、二、三、と云ふなり。アルホルの某秤量に於て包含する物質の秤量、即ち、炭素、酸素、水素の秤量、を求めんとす。

炭素の秤量は五十二分、酸素の秤量は三十四分、水素の秤量は十三分、と云ふなり。總計百分の一、二、三、と云ふなり。甘味の諸液泡醸し因りて鋭烈の液に變じると云々。既に論説せしが如く、炭素某分と酸素某分と飛散せり。炭素より、酸素は更に多し。又此二素の遊離せしむるに於ては必ず有機連を生じて液滾沸せり。其故に此二素の親和炭酸瓦斯の某量を生ずるに在り。○今後、残留する液中より自然に水素及び炭素



の分量は含有す是、酸素は多量に炭素は少量に飛散
 して水素は毫も飛散せずと云ふを以てなり。○此新
 生の酒精は素糖より作りし時より自ら酸素を含
 むるは少なき故に糖粉に在るも亦同しといふは、糖
 粉も其成分は於ては糖も全く同じければなり。○酸素
 と親和性を示すは機能も亦更ら大なりといふ言は
 變換して云ふと云々糖若くは糖粉より作りし時
 ても更ら糖焼の性質なきなり。○アルコホルハ其秤
 量百分中、糖質六十五分即、炭素五十二分と水素
 十三分を包含すと云ふは糖ハ、四一八分半即、炭素四

十二分と水素六分半とを包含せり
 此糖焼は易き流體アルコホルハ其分の糖は更ら聚合
 體となし由て之を得、且一異名を以て貴重なる者
 として持水と混合しべきの異性あり、但し清水と
 好んで和するは以て少くも水は混ぜりて之を得
 ると甚だ難しといふ。○世に純糖アルコホルと稱す
 所研の者も尚、常に百分中、水二分を包含せり、アル
 コホルハ其水と和するは好む性質あり許
 多の物品を浸す時ハ火を以て乾らすはかく全く其
 物品中の水分を吸収し去るなり。○若夫肉或ハ動物

體中の他は物體を酒精中に投入し置く時ハ酒精其
 織理より水分を吸收するを以て其物の收縮するま
 と恰も燥熱の地に置く如く爾後復た物質ハ其他
 比變化を起すとを以て其物復た溶崩腐壞し傾
 くまゝなり○纖維乃質より水分を除去すれば生命
 全く遏止する者ハ於ても決して溶崩を起すこと
 此の如き者ハ然せばざるまゝハ溶崩忽ち起らんと
 するなり○今學理に據るる酒精の右に如き性と亦
 必要として採用せり譬へば解剖する身體の各部は
 久しく貯へんと要するに於てアルコホルを浸

漬すは何年或經るとも之は貯蓄して生徒教導の
 爲とありと心得べし此の如くも諸物成世上下
 水浸キソトナルと名く
 今アルコホルの此の如き性を胸懐に記すと
 鋭烈の飲料を胃中に容るれば急變の事件起るを
 きづを更と能く了解するを得べし○アルコホ
 ルと水とを共々甚だ稀薄なる流體なり之を能く混
 合して同齊する用は直に毛様管の衣膜を貫透し
 て血と混合し更し稠厚なる物質ハ夫より分離して
 固形の食餌と混合し胃中に残留して消化し或ハ排

血液あせかり、○「アルコール」一回血中不入るとは、血行と共に身體各部に循環して各部に其機運を覺へしむ。

但し此可燃液アルコールは血中に在て天然必須の成分あり、又下級の獸類に在るは決して血中に在ることをあく、人にしては亦幸ありて必は血中に存するものとす。○方今奢侈強盛の世に於ても千万人中ふと其健全存活の間へ決して此液を一滴も血中に入らざる者あり、○然れを「アルコール」に必ず血中本然の成分に非ざるが故に一回血中に入らざるとは、

必は彼此の方子カクを以て之を排除すべしと云、此物に無用且無害の刺分コライチをとりぬくと、尚之を排除せしむべしを得ずと云、其故は此物動靜而脈中に吸収される時、限定する有用分の為し要とするべき地を掠奪しべきを以てなり、又身體諸器を造成する為し此物無用と屬す、是此物に線質の如く造成固形の性を有せざるなり、人宜く之を為し必須あると云、含窒素物をとりては記憶すべし、然ども「アルコール」に他の事件に要需あるを以て、此物に血中の燃焼質と殆ど同しく燃焼するものと云得るべし、血中に入るとは亦燃



燒すは得るをいふ、○アルコホル糖中不在る酸素の大分は消耗するが故に、其残余の分準して酸素と親和するの性大なるを見たり、又アルコホル中は炭素及び水素は呼吸に因て吸入する酸素と和すれば常に温成起して炭酸と水とを生じ、肺より蒸氣とを以て體外に驅散す、此の如き式を以て血中より酒精の排除するは、恰も血中に入るとき時の如く其速あるごとく實に驚異多し、然ども其體外へ排除するの機は自然其處に現在する酸素の量に關係し、又燃燒の機力に關係す、乃ち知る吾人爽快の大氣中は在るを

甚しく運動するを以て、狭隘にして大氣通じざるは居室中に在るより、甚た多量の酒小量ゆき、是爽快の大氣中に在るに、酸素多きを以て之と親和するごとく甚だ大なるに因るなり、但し速に之を疑問起す者あり、曰くアルコホルは之を飲めば直に再び排除すべき者を造る大害をあるとを、殆ど中立をいふと、之を答ふるごとく左の如く、曰くアルコホル自ら燃燒する間、他の成分の燃燒を妨くと、○今アルコホル中是一片の紙屑を蘸して之を火焰中に致すと、アルコホルは直



小燃えて消失すと雖、其紙屑ハ暫時損するも、
 ろ、（此ハ唯香水「オード」を以て試み知れべし）又
 燈₂於てハ其油櫃中₂絶へば「アルコール」₁ヲ（焼酒を
る時始、ホ出、で來、液あり、因て「ホ」蒸餾を
ル「ロ」名、益、前行の義あり、液加ふ、棉線
 製の燈心火の為小燒燼するも、蓋「アルコール」
 ルハ酸素を悉く已、方「引かん」とも、程ハ酸素と
 強く親和するの性あり、○今「アルコール」人身の
 血中「入りて他の燃焼質と混合する」とも、亦之と
 同一き事發生して「アルコール」自ら燃へる間ハ他此
 物質と燃ゆるは、是「アルコール」ハ肺中「來

る所の酸素を悉く已、方「引かん」とも、程ハ酸素と
 強く親和するの性あり、○今「アルコール」人身の
 血中「入りて他の燃焼質と混合する」とも、亦之と
 同一き事發生して「アルコール」自ら燃へる間ハ他此
 物質と燃ゆるは、是「アルコール」ハ肺中「來
 入を以て血中「燃焼」へき諸物を「アルコール」尚燃
 焼する間ハ、變換するも、あく「山」成要するハ、
 了、（胆汁其他更小稠厚の物質、自然の良能身體代
温保するが為、設け、燃焼質をい、人若し自
 家の嗜好を以て飲の甚と揮發ある燃焼物（酒精）を體
 中「輸入する」とも、其自然の燃焼質體中「蓄積を
 ろ、故以て血中「許多の蓄積を生じて周流中適宜
 小之と清利する」とも、得て生體の全機「平衡」を失し、
 且、事態自然「反する」故、一異、良劑を用ゆる

傳 卷之五 至高齋雜考

を得少くに至り或は避くもあらず得るくもさう障
碍及び疾病を起すに至るべし。今強烈の飲液を用
ふは其内は在るアルコールに於て既ち食用せし
他物よりも速く燃焼せしむる性質の別と攪素す
るは理ありと雖もアルコールの量に適する粉末類
若くは脂質は食物を過むるに非ざるべし。決してアル
コホルを用めざるは以て良しとせざるべし。葡萄酒或
は強烈の麥酒を日々適量に飲むるは必ち脂肪又ハ
蒸餾菓實に代用せざるを得ず。決して其食物が十分
に併用せざるは必ち此事件を忘却するべし。

必ち身體に疾患を起すなり。但し此法則に用心せら
るるも尚ほ今論説すべし他の理に因りても酒精は
連用せらるるは必ち患言を起すなり。
今先、始末にアルコールの誤用を説示し、尔後其に用
小因て生ずる續症を左に論述せらるるべし。
若し酒精血中に入りて呼吸に因て驅散せらるる
も多量ありとせば此物自然體中に蓄積して全然た
に異症を發せらるるに至るなり。アルコールは其始に體
中に入るるに至る處の諸器を強壯して心の搏動
急疾せらるる且、強劇とありて、皮膚は温煖とあり蒸發

建 卷之五 下編 白六十四 文

氣盛とあり、分泌諸器ハ常よりと大量と諸物と分泌
し、顔面熱して活潑となり、眼目光亮し精神爽快と
此諸症と總く其初發の徴候たりとも、忽ち右の諸
症よりと許多の症發するに至るあり、即ち考慮特
自由となりて言語急疾し發せるとも、其言語考慮共
し智識を以て適宜に調理する者とを思はれざるを
了○復を考慮を具思ふ目的よりと接續するものと能
く消去せらるるなり、
其能を簡しと論じると、精神の高き即ち辨識及ハ謹慎

の能他ハ強判衝するといへば作用を以て幼弱を受け
腦・神經の質身體他部よりも多くアル・小脳の為
侵襲せらるる、是此處ハ特に強烈飲料を多量と與へた
る獸類に於て觀驗する所あり、而して其獸其後直
死に至るものなり、其腦小同一大の他部よりも多量
にアル・小脳有るは強判衝なり、然ども神經の質アル
コホルハ液包を含有するは、神經之よりして患害を受け
其アルコホル存在するの間、其官能は切實に於てハ
らと能つて蓋し神經も猶筋の如く其機關に於てハ
物質の交換を以て本分とする、故に血中に包を



く神經不達來る酸素其地より酒精と會するときはハ復と其成分より自在ある作用被るすこと能はば其故ハ此の如き時不在して其親和殊に酒精の不在を以てなり。○神經節の最靈最微の部即智慧の所在ある腦髓最初は此患害を得るを以て許多の考慮續出するときは異常に急速なりと雖是非を辨し且熟慮するに能はず失せり。アル・小血中に入るときは酸素の初微は見えぬと左の如く即血行急速となり顔赤れく火の如く精神爽快となり言語爽快となり多少譫語を交

ゆるをり、その諸徴見るとき時時酸素の過剰は呼吸輸入に過しるを以て其揮發分徐ろく而出る呼吸を以て驅出する故に腦髓及び神經の質は稠着すれアルコホルも亦消散するに在りべし此の如き事起るときは其甚しは判衝を受くる諸器其判衝物致棄するが故に諸器弛緩して麻弱となり皮膚乾燥分泌機怠慢し精神多少痴鈍を成たり然るとき少時休息又は睡眠すれば其惡症少く宛回復して身體再び常態に復するなり。然るも右の諸徴を慮錯亂見れて後も尚新アルコ



傳金醫 卷之五 主 齋 齋 齋

ホルを血中へ送りて過まざるを、神経の質小致
ざる患害其他部小すで及びく先、脳髓全く其官能
ありとなく能く辨識及び謹慎の能全く消失し先
貴重なる知覚を以て一身の總理者人今、更
小下層に在る脳髓の麾下に屬するは、嗜好情慾
及び相鷹あり知覚諸器の管轄を受夫之は、命づ
て智腦を如獸に如くするなり然れども其毒漸々
靈活微ある知覚神経を侵襲するに従ひ嗜好の能力
も亦消失して昏冒異聲異視其他諸多の迷誤を生し
兩眼半滅失ひ、面色淡白となり、諸筋顫振して縮力

失ひ、四肢其用不適せし何の處あるも擇ふとなく
扶柱するも能くして地上に倒る、是、醉客の尚有
害液を服さんとすは、過むる自然良能の最上方術
なり、
今此地に至てハ、急變様の事發生するや、宜く之を理
解すべく、又宜く其實情叙述すべし、即ち個の全く酩
酊せし人々最、危険の中在りて其景況毒藥を服そ
る者、齊一、力ある意旨なく、又人事、省するは、
く、一回落ると復た歸るとは、得ざる、深淵に臨
むが如く、一時、てハ、毫髮の差異其落ると否

建 卷之五 下編 頁十七 校 齋 齋 齋

少事と成定むる、身體の諸器を麻痺せしむる乃
兎機不在くハ人更不省として後來死に至らしむる
こと、屢治滴の多少ニ關係する例證少しとせざるを
也、
アルコホル小量少ても血中に入るとハ、既ニ智腦
及び覺腦を麻痺せしむるが如く脊髓の神經をも亦
麻痺せしむべし、而して呼吸諸筋を運動せしむる者
も此脊髓神經をろく故に、呼吸も亦過むるに至ると、血
ハ清潔ある動脈血とありずして、不潔の汚く動脈中
に入ると、微弱なる心動二三搏保續して、全く其運行

成發絶とせしむる、
若し人居常アルコホルを體中に入して過するとき
ハ、必だ右の症を發するに至るべし、然とも全く酩酊
するに至るときで、宴飲する許多の酒客も、此最後の死
症免るるあり、但しアルコホルの毒ハ其性揮發
あるが故に、醉客比人事不省中他人より尚其口小銃
烈飲料ハ暴勵ハ注入す候時ハ其人の死に至らざる
見らるる事も亦之あり、又其注入なく又人更不省と
するに因て飲酒も亦止むる雖、既ニ飲服せしアルコホ
ルハ因て覺腦及び智腦ニ於てするが如く、脊髓實ハ



妨碍を受くるも亦之あり、是之に因てハ呼吸過
 と尋で死に至るなり、
 但「アルコホル」の因て生ずる人事不省は由て、右に
 如大危険を幸うて逃るゝことあるも、復々全
 死を免くことすして只暫時免くことなるの難件あり、○
 人常「アルコホル」飲服そのの習癖あることなり、早
 晩右の症を得頓漸其地に至るなり、○近世ハ衆人甚
 々勉強して人生の記録を作て、即衆人の死生を精細
 小記し以て其死生の況則死學ふこと得るはあり、
 其後其事に熟する者之を檢點し、且更に研究し之ハ

因てて許多の適當なり證據を得たり、功珍文學昌盛
 なるは世に在てハ、人生の長短を關する原因を知り
 得るは、性肯なりもの切あり、其年齢の人ハ尚發
 許年生活し得るは、其計算なり、若夫其人の撰
 生及び習慣を全く檢査するは、其得る其審査數多
 の人ハ、其及ぶこと、最其實を得るに近き者なり、
 今耽飲家も適宜ある酒客の生命の長短を測算す
 こと、其中數如何あり、實不方不出す、如くならず、
 其即適宜なる酒客年齢二十歳の人は、其死後、其
 人の遭遇は、災厄及び身體の病故は、拘る事、尚



四十四年生活身をたぬ妙理あり然るに耽飲家の同
齡あり人た約計りた適六十五歳生活す人き餘命未
だの其の中冷や個の強健あり少来防後會に入るや
年其保人者某量の銀を陵才置た其死時少も臨終其
後嗣は某量の銀返給せり其子も其銀を以て其
小其會生たる者其會に入ら人の時其銀を飲料に過
せり知りしに其保證人たり其難死を以て
其出銀返便は多し其非あり或る在り之を辭り
其故は年累の經驗を以て之を學し徹半又之を由
民之死者究するに右此如人外外面強健に見ゆ

と雖實ハ既ニ死者やして其習慣を息むるを死
間ハ、しつちても死を以て去り、
吾人預り之を鑑みて飲酒を娛樂とせずとあり、
蓋し飲酒ハ娛樂とあり、多に飲敗きて却て之を
得ず、先ん時々酩酊する習癖あり人其酩酊毎又
自ら毒を眼するに同く、又墓門不近く、齊し或は
時として其人自ら不摂生を行へども、自然の良能之
成善路不導を其危難を免るる、良も往々之あり、
然ると娛樂に迷ひ二十歳若くハ三十歳まで其表見
の娛樂小身命を拗つ者多しと云、

建 下編 百七十一 伎高官成反

「アルコホル」の害をなすは直に死に致さずと雖徐々
 1. 身體に損害をなす諸景況相輔奏するあり、他の諸
 件ハ明白に論すべし、¹ 雖左の件々ハ甚と明亮
 不之見ざるも、² 得べし、³ 即血ハ銳烈の飲料不因て
 稀薄となり、造成とあすに適せば、又線質の聚合弛緩
 して強剛となり、⁴ 且血ハ生活の流動物をなす、其他
 の所由不因ても亦不潔とあるなり、⁵ 「アルコホル」ハ
 其有害の質を以て要項ある物質の領すべし、⁶ 地ニ充
 實し、且炭素性の物質及び燒化を要する他の燃燒質
 の排除中も亦妨碍となす、⁷ 是「アルコホル」ハ其要用成

なり、⁸ 氣中の酸素を特りに、⁹ 其の吸収も尚血中
 2. 在るの間ハ其不潔分血中より除却するべく、能
 づばるは以てなり、¹⁰ 「アルコホル」を含有する各部ハ甚
 しく膨脹して常態を要とするよりと、¹¹ 筋多の機進を
 するべし、¹² 又「アルコホル」と相接する生體の軟弱部ハ
 生體中の為ニ嫩肉及び熱を起すところニアルコホル
 2. ハ直に生命を奪ふとす、¹³ 雖諸般の式を以て
 健全を損害するに適する諸物ヲ周旋せざるも、¹⁴ あり
 各ハ實に身體の健全ハ身體ヲ集成する天然の機關
 を全するに在りて、其諸機良好ニ合同するに時と

して千百の細小事件不關係まうとあり是を以て
 直達の妨碍日々現れ来る時不在てハ其損壞幾何
 物知る益うは
 アルコホルハ多量不用れバ病發起し又死發致す
 者ありを以て配飲家ハ自ら死を招く不常とるま
 是も疑ふべうはさう所あり是故に今有害あるアル
 コホルの大量ハ何の地ニ留まらざるを知らんと是を
 緊要ありて又之を少量小且其を稀釋して用むる時
 も尚有害ある益を瞭解するに用要あり○衆人
 日々の經驗を以て思ひらく酒類若くハ強烈の麥酒

を晝食の時適口ニ用むるバアルコホル亦小中者
 不於て驗する如記大害ハ決してありらざる然
 とも是より由て小量有害症の憂減全く免うべくと
 する益あり是故に以て我輩今見小稀釋するアルコホ
 ル即葡萄酒、烈麥酒等毎日々用むる由て既に確
 切不知を得たるは益なり茲に示すん○第一アルコ
 ホルハ他ニ加味する物かたはハ栄養の功あり是故
 以て身體各部を造成するに要項とするまとあり第
 二アルコホルハ水の如く他物に溶解するまとあり
 或ハ水と混合するも栄養分を溶解し且運輸するま

と單味の清水に如く、是を以て「アルコール」ハ幾許
 小量に用ゐるも、飲食消化に於てハ無用の物なりと
 せ
 但し身體に要する温氣起すハ小量の「アルコール」
 亦「アルコール」以て甚だ適當とすべしと云者あり、如何に
 否、其故ハ「アルコール」の身體に入らずして直に「燃焼」
 云々するも、他物に先ずて入る所にて「アルコール」亦「
 燃焼」すべし、他物も漸々燃焼して且「アルコール」も「
 燃焼」すべし、如て「アルコール」の爲に物得を受け
 尚且「アルコール」ハ「燃焼」して身體を温煖するは、他

の燃焼物油脂・糖に代り、雖も他物の温煖を方子よ
 りも其益より所少、此を以てをり、○「アルコール」の燃
 焼を實に油脂よりも迅疾なりと雖、血中に起す所は
 温小至てハ他物よりも少しといふ、油脂一斤を以て體
 中に發越する所の温ハ「ビネール」穀物より「
 半斤以てするよりも大なり、アルコールハ性迅疾を
 有し、雖温氣發越するも少し、先づて酸素と親和して
 他の燃焼物を傍側と違ふと雖、遂に之を算定するに
 方くハ温氣生ずるに却て少し、○若し人銳烈の飲料
 又ハ強壯酒を飲めば、實に其體熱灼するを覺ふ然し

と此熱灼ハ殊ニ「アルコホル」ハ神經刺激を以て因
 く血運急疾とありより起るを色バ、諸部常ニ反して
 甚しく尤進するなり。○此熱灼ハ太抵飲食ハ直ニ覺
 ゆるあり、是「アルコホル」ハ飲食消化の道路ヲ經て
 て直ニ血中ニ吸收する。故かり、然ども其理と齊
 しく其熱の去るものと亦至る速かり、即「アルコホル」
 體中より揮發する後ハ、血行益徐緩とある。故かり、
 又故ら小身體の運動ヲ催進する後ハ、其體常よりも
 冷ニ覺ふ。此の如き時ハ、人常ニ「アルコホル」を飲るゝ
 之ヲ救ふんと欲す。此諸件ハ因テ人其體をして刺激

かりとバ、漸々小自然の常機を全ふする。と能はば
 此に至らば
 是故ニ「アルコホル」ハ包含する飲料ハ假令甚だ稀釋
 すと雖、左の三件あるが故ニ、用するごとく、或禁すべ
 し。即「アルコホル」單味してハ、榮養の能力少し。之
 ろ「アルコホル」ハ他の食物の榮養分を單水の如
 く溶解せし、又運輸も亦た「アルコホル」ハ熱
 液起すと雖、他の燃燒質の如く甚しきとをかくして
 之ヲ燃燒せんとする地位ヲ棄ふ。
 然るニ「アルコホル」ハ身體上ニ如何の作用をなすや、

曰く、アルコホルハ其通過する所の生器或更ニ興奮
セリ、即チ二蓋の好酒飢餓或起して胃の消化機を
旺盛とせし、是レ由ク心悸甚しくなり、且精神も壯盛
とあり、但一右の式小據して諸機旺盛するも假令幾
許僅小なりも必ず後ニ衰弱を起さべし。○我輩既ニ
身體各機ハ其状態様あるを必以彼此の物質消耗
するより起ると理解せり、是を以て各機亢進を
受ふる器械ニ再び尋常の弾力或回復せん、其
器械尋常の式小據して機運をせしむ要するよりと

久し如安息を要し、此ニ於て假令少量なりともアル
コホル或日用する習慣の有害とあり、或は知らざる
て、○胃腸及心臓整齊ニ其官能を以て問ハ決
之、或衝動するに要せし、然るに何の故或以て既ニ
能く消化の機運をなす胃腸ニ消食する為の刺衝
與ふを、或此式小據して其既ニ健全なる或更ニ健
全トせん、と要するに、却る疾患を得、或は失ふ
より、他事あり、或は

若一二の器械絶へば、療藥或受くるも、或速ニ其固
有の機括と失ひ、人為の刺衝ニ委任するに至り、此



の如くして進む行くとき、其器械漸々刺激不習
慣して痲薬も復た其効をなすは多量と與へれば
能はざるに至るべし、

右の事件は酒癖ある人、於て常不酔する可なり、今
毎日酒二鐘を飲むと、初は始むる人、毫も妨害を
受ぬと云ふ、速く六鐘を飲むと、酒得るに至るべし、
此は如く進み行くとき、其入速は二鐘の酒を用ゐ
るを得るに至り、且、此量想ふ他、人々有害ある
る處に、今や身體少くも酒の害を受くることを
程亦之に習慣せりと、今之は轉して左の如く言ふは

と得べし、今汝の體自然の常機を變へたり、是を以
て「アルコホル」の大量此の運為をなすを見ざる、汝
の體既其損害を受けしありと、○我輩少量の「ア
ルコホル」を用ゐるに、胃の機能は盛なり、「アルコホ
ル」は用ゐる時よりも許多の食物を消化せしめ、其
を知れり、此の如くとき、恚癆様の事發生するや、曰
く、血液其要須とするより、血管中に多量とあるを
其故に「アルコホル」を用ゐるに、曾て饑餓を覺え
し、其故に「アルコホル」は、自然の常態榮養を過分とせざる
の一證をねばり、即身體は貯蓄十分あると云ふ、饑



餓の過ゆるハ自然の定規あり、
 是故リ刺衝を以テ饑餓を起シバ人為の多血を以テ
 身體各器時々刻々蓄血を生トテ遂ニ激衝を起す
 小至テ分泌諸器其機關を重複チテ或得ル者あり、
 其故ハ常ニ排除セザル要する無用の刺物ハ人為
 の饑餓ニ因テ體中ニ致ス者ありテ造成質とカ
 ラズル刺餘の食物とも尚ホ排泄スルを以テあり、○
 今「アルコホル」ハ其分泌諸器ニトシテ運為をなすハけ
 ち、之ニ亦大過の機カ増進セズ、然レモ此ハ寔
 ホ一瞬時の事ナリテ上も云ヘク如ク、大過の機カ

ハ必ズ後ニ勞倦を起サ故ホ其安息も亦倍加セズ
 或要すべし、又安息するごとくホ身體ニ要するより
 も多量の食物を美味ニ食シんガ為ニ饑餓亢進
 テ過チテ其身體必ホ健全を傷害セズ、○
 ルコホルの作用ニ由リテ暫時胆汁多ク泌別スル
 肝臟ハ漸々ニ其刺衝を多シバ胆汁を分泌する能力
 失ハレ且日毎ニ衰微ニ至ル者あり、○若シ彼此の生器其
 自然の常機より盛ホ運營をなサカたハ衝動セズ
 然レモ其器暫時の間ニ能ク之ニ順從するガ如
 くと雖、忽ち衰弊ニ至リ且渾身も早晩必ず衰弱ス



致るなり

日々食膳小美味の物に備へて其胃中より多量の食物
 を填て且一満鍾の酒を多くとせば飲む人の漸々
 彼此の疾患を準備するに齊しくして其疾患必は數
 年の後一時に發起すべしと云ふ○若其人學問の基き
 く造化の告示する法則を檢査せば總て些少の前徴
 予も意を用ひて其大患に至るを免る事たるあるを
 然るに今其人醫を招きて之を診て數年の懈怠を
 一時に四復ちんせしを乞ひ且甚小劇感の發起せる
 胃癭肝臟病及び腸患を除治せんことを希ふ豈得べ

らんや

上文説く所が基本として健全ある人の為は小量
 までアルコホルを飲むより寧ろ全く飲まざる
 法則が良しと採用するを要すべし○若夫アルコホ
 ルを極めて少量又は極めて稀釋し用ひるは其身體
 の常機其些少の毒を排除せんとして全く確して
 稍有害となる前ふ之を除去するは其得るべきに
 但し其排除容易く之をす得べきも必は健全部
 分在て些少の奮激を要す蓋し此奮激はアルコホル
 を用ひられば之を起すに要すべしして身體を造成す

建余學

卷之五

下編

頁十六

波高館藏版

温煖を起しに用ゐる者も、今只其無用の剩物を除くに之と要するなり、但し右の諸件ハ關係して「アルコホル」と時々してハ實ニ有益なることあり、即其刺衝と大利益と一々用ゐる病に於てハ如し此の如き症ハ在て乃「アルコホル」の服量及び用法ハ其昏冒・酩酊の功を奏せざる許す之を與ふるに在て、而して一ハ之と用ゐれば其内含する精氣速ニ酸素ニ由て燒化し、一ハ其刺衝の功只其大衰弱を補ひ、且其生力の平均を失ふ者ハ回復を促し、是を以て險重なる熱病を患

ひく後回復し赴くんとす者、酒に用ゐる屢治す至るべきを、收り疑ふべし、非ず、右の如き症ハ於てハ造成の全機暫く廢絶する原因は血氣之不足也、一時消食機を催進し、或ハ一時血中不揮發する燃燒質「アルコホル」を輸入して害を免れ、許す之を補足する事、○身體衰弱する者ハ總て右様の熱物及び饑餓ニ由りて食する物ハ最好く堪ゆることを得べし、然れども「アルコホル」の其疾病ニ要するもの性必は常症を害すべし、是れ性質あるものと遺毒を有するものと、此の如き症ハ「アルコホル」に用ゐるハ

其病治まらざるを得ざれば、宜く醫藥を用ふるこ
 とあり、○總て疾病は醫藥を用ふる所の者
 と健全體は用ふる所の者、必は變化を起すべし、而
 て健全體不變化を起するは、必ず疾病を起すべし
 ○健全體は、一の變化は要せざれば、只自然の良能
 に任ずる、一は要せざるは、
 今飲料を論ずる末章に於て尚記すべし、要するは、
 麥酒、葡萄酒及び鋭烈の飲料と全く同列ならず、
 かつ、
 事なり、即第一麥酒ハ葡萄酒或ハ「セ子」
 コル、
 アルコホルは、
 第二麥酒ハ

本來の食料とあり、
 分、即膠質及び糖質を含めり、
 ○燒酒は蒸餾するに方て、糖質總て、アルコホルは
 變遷するも、麥酒を醸造するに方て、其完成は至
 り、
 糖質溶化するも、
 然るも麥酒中は右の食料と
 養の功と具せり、
 常は血液をして多少流動し過
 るべし、
 アルコホルも亦あり、
 故は是れ由て造成質
 の各部は固着する、
 妨は、
 酸素は、
 方は棄
 ひ、
 他は、
 燃燒質を消化せり、
 一言以て之を云ふ
 と、
 身體諸機を徒ら進せり、
 〇茶



加非シコロラード及び其他此類の飲料も麥酒の如く
 榮養の功ありとも、右の如く絶發の後患あり、是を以
 て常水より全く他の飲料に用ゐんと欲せば、酒若く
 ハ麥酒より右に記載する諸飲料に用ゐるを以て
 更ニ智と云ふべし、

近年健全體小「アルコホル」に用ゐれば如何の繼發症
 あるや、査檢査するごとく甚だ患勞一たりなきは、是
 小由く大ニ發明を得たるあり、即チ千八百四十九
 年印七の麻打拉薩ニ駐劄する歐羅巴軍中少一も酒
 類に用ゐざる兵士一歳中ニ五百人よりして五人死

少一宛之に用ゐる者一歳中五百人よりして一人死
 一、無量に用ゐる者一歳中五百人よりして二十二人死
 たりと云、然れば此等も明證として十分足り、又何の地
 小於ても此の如く之を檢點せば能く之を知り、あ
 り得べしとす、是現ニ目撃する所の事ハ議論よりして
 確實なるにあり、○右の事件及び其他乃實驗を以て
 するに、幸小健全なる人、更小健全を保護せんと要す
 る時ハ、飲食する所の物を務めて減らすに慣れ、日飲
 料中、特に「アルコホル」に含有する品に慎戒するに良
 るあり、決して疑を容るなからん、○少年の時より大

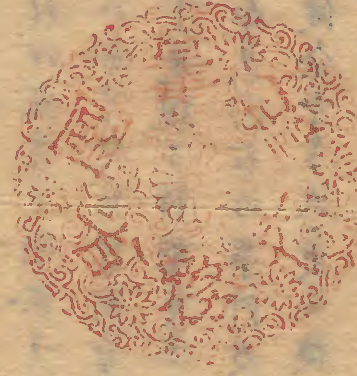


健全學

卷之五

至高館

食を以て胃は損ひ、又「アルコール」を消滴を血中に入らしめ、かくる者ハ、之に因ての既ハ人間に在り、許多の疾患と成る事、起因は免れずなり。



健全學 下編 卷之五 終

